

女子大学生のライフコース展望 —「ジェンダーと教育」研究における二分法的視点の再検討—

大道真佐美（お茶の水女子大学大学院）

1. 問題の所在

女性の教育達成・職業達成に関する研究は、これまで「ジェンダーと教育」研究のメインストリームとして展開してきた（中西・堀 1997）。あえて単純化していえば、これらの研究は「なぜ女性は主婦か職業人かに分かれるのか」という問いからの出発だったのである。そして多くの研究は、女性内分化は後天的に作り出されること、特に女性の将来への志向性に注目してきた（中山 1985など）。

これらの研究は、女性の志向を「家庭か仕事か」の二項対立で捉えて問題化するものであり、男女平等の実現に対して戦略的な意義を持っている。しかしその一方で、多様なライフコース展望を持つ女性を捨象している。本研究の目的は、次の2点にある。第一に、先行研究が女性の志向を「家庭か仕事か」に二分してきた視点に対して、女性の志向を家庭や仕事を含めて幅広く捉えることである。第二に、それによって、先行研究の女性に対する二分法的な見方や解釈を問い直し、より現実的に即して女性の志向する生き方を捉える研究のあり方を、考察することである。

2. 実証研究の対象と方法

調査時期：1997年9月～10月

調査方法：質問紙調査（集合・郵送・留置法を併用）

調査対象者：首都圏の4年制大学に在籍する、女子大学生307名、男子大学生278名の計585名。有効回収率62.5%。

本調査は、1997年度東京女性財団の自主研究助成費を受けて実施したものである。なお、本研究では女子大学生を分析の対象とする。また大会当日、詳しいデータを配布する予定である。

3. 分析結果

3-1. 本研究の用いる「家庭か仕事か」の二分法の指標

本研究では、結婚や出産後の仕事と家庭の両立形態についての質問を、先行研究における二分法的視点の指標とし、女子学生を主婦志向・中断再就職志向・職業継続志向の3つに分けた。このような質問を二分法

的視点の指標として用いるのは、結婚や出産後の就業経歴の選好に、女性が自己を重視するか妻・母役割を重視するかの差異が見出され、そこに女性の職業意識の高揚や職業教育の必要性が主張されてきたからである（牧野・上野 1986など）。特に高学歴女性を対象としたこれまでの研究は、家庭を持っても職業を継続したいか否かに、大きなポイントを置いてきた。そのため、家庭志向と職業継続志向の中間に位置する中断再就職志向についても、日本における女性独特の就業経歴選好としながらも、職業を辞める点に家庭志向の傾向を見出し、そうした生き方の危うさを指摘してきたのである（村松 1997など）。

3-1-1. 将来希望する職業的成功と家庭的成功

将来希望する職業や結婚観などの回答から、これまでの先行研究における結果同様、「主婦志向と中断再就職志向」対「職業継続志向」という線引きを行えることを確認した。

①主婦志向と中断再就職志向の女子大学生

希望する職業は、職業威信スコアで中位から下位に位置づけられる、小・中・高の教員や企業の一般職が多い。結婚することや子どもを持つことを、積極的に考える者が多い。

②職業継続志向の女子大学生

職業威信スコアで上位に位置づけられる、大学教員や研究者、国際・上級公務員などの職業を望んでいる者が多い。結婚や子どもを持つことには消極的、否定的な者が多い。

3-2. 女性の志向を捉える新たな枠組み

3-2-1. 本研究の枠組みと分析方法

一方本研究では、新しい枠組みによって家庭と仕事に対して多様な志向を持つ女性を捉えることも試みた。これが本調査の最大の特色である。具体的には、「家庭のみの領域」「仕事のみの領域」「家庭と仕事の両方の領域」として、計9つの女性の生き方モデルを筆者独自に設定し（表1）、20点満点で評価させた。そして、一人の女性が望ましいと思っている多様な志向を明らかにするため、9つのモデルに与えられた得点を個人内で標準化した。さらに、3つに分けた就業

志向者別にクラスター分析を行い、構成人数の多かったクラスターをそれぞれ2つずつ取り出して、検討した。

表1 9つの女性モデル

- A結婚し子どもを生んで、大企業で働いているキャリアウーマン（以下「家庭を持って大企業」）
- B結婚し子どもを生んで、美容師をしている女性（以下「家庭を持って美容師」）
- C独身で、一般事務員として働いている女性（以下「独身で一般事務」）
- D独身で、弁護士として働いている女性（以下「独身で弁護士」）
- E育児のため新聞記者を辞め専業主婦になった女性（以下「仕事を辞めて専業主婦」）
- F育児のため高校教員を辞め自宅で塾を開いた女性（以下「仕事を辞めて自宅で塾」）
- G育児のためパートの店員を辞め今は事務のパートをしている女性（以下「仕事を辞めてパート」）
- H専業主婦で資格取得のために勉強している女性（以下「専業主婦で資格取得」）
- I専業主婦でボランティア活動をしている女性（以下「専業主婦でボランティア」）

3-2-2. 分析結果

3つの就業志向者別に出された、各2つずつのクラスターについては、次のように特徴づけられた。

①主婦志向に分類されていた女子大学生

- 1)「専業主婦で資格取得」「専業主婦でボランティア」「仕事を辞めて自宅で塾」を高く評価しており家庭に入り教養を重視するタイプといえる。
- 2)「家庭を持って大企業」「独身で弁護士」を最も高く評価しており、職業威信の高さを重視するタイプといえる。

②中断再就職志向に分類されていた女子大学生

- 1)「家庭を持って美容師」「仕事を辞めて自宅で塾」「専業主婦で資格取得」「専業主婦でボランティア」を高く評価しており、仕事と家庭を両方持ちたいと思うタイプといえる。
- 2)「家庭を持って大企業」「家庭を持って美容師」を最も低く評価しており、家族に迷惑をかけないことを重視するタイプとえる。

③職業継続志向に分類されていた女子大学生

- 1)「家庭を持って大企業」「家庭を持って美容師」「独身で弁護士」を高く評価しており、とにかく働き続けることを重視するタイプといえる。
- 2)「家庭を持って大企業」「家庭を持って美容師」「専

業主婦で資格取得」「専業主婦でボランティア」「仕事を辞めて自宅で塾」を高く評価しており、仕事と家庭を両方持ちたいと思うタイプといえる。

4. 考察

以上の結果は、先行研究における女性に対する解釈を2点修正するものである。第一に、主婦志向と中断再就職志向の女子大学生は、家庭的成功を求める点で同様に捉えられていたが、本調査の方法によると、両者の考え方には大きな隔たりがあることである。第二に、非婚で職業のみを志向すると捉えられていた職業継続志向の女子大学生の中にも、家庭と仕事の両方を求める女性が存在することである。

このことは、各女性の就業経歴選好を単純に家庭か仕事かの二項対立として問題化するよりも、むしろ彼女たちがどのような選択肢の中からそれを選んでいるのか、そうした選択肢を構成する要素は何か、を捉える研究の必要性を示している。それが女性の性役割受容などの問題を、より現実的に即して捉えることにつながるといえよう。

なおこの問題は、階層とも密接に関わっていることである。今回の調査対象者となった女子大学生の父親の職業は、専門職約2割、管理職約4割であり、彼女たちの階層は比較的高い。こうした階層の高さが、彼女たちの多様なライフコース展望を構成する要因として、大きく影響しているだろう。これまで日本の女性に関する研究は、階層の問題を十分考慮していないことが指摘されている（木村 1992など）。

しかし本研究は、大学生を対象としているために、この問題について考察するには限界がある。今後は、同年代の短大生や専門学校生のライフコース展望を、階層の視点を入れて比較検討していくことが、課題である。

【参考文献】

- 木村涼子（1992）「女性の性役割受容をめぐる」『大阪大学人間科学部紀要』18,103-115。
- 牧野暢男・上野真理子（1986）「女子大生の就業意識の構造」『大学論集』16,123-139。
- 村松幹子（1997）「キャリア形成途上段階女性の雇用市場退出と一時退出の判別」『教育社会学研究』61,103-122。
- 中西祐子・堀健志（1997）「『ジェンダーと教育』研究の動向と課題」『教育社会学研究』61,77-100。
- 中山慶子（1985）「女性の職業アスピレーション」『教育社会学研究』40,65-86。